

2. 事業の概要と成果	
(1) プロジェクト目標の達成度	<p>上位目標 1: ガザ地区および西岸地区の子どもたちが占領下における困難な状況下でも PTSD¹に対する対応力・予防力を身につける。</p> <p>上位目標 2: 当該地区において、心理社会的ケア（以下、PSC）モデルが確立され、地元の人々によって心理社会的ケアが継続される。</p> <p>プロジェクト目標 1: ガザ地区ラファ市およびハンユニス市、西岸地区ジャラゾン難民キャンプおよびカランディア難民キャンプにおいて、対象の子どもたちの PTSD の完全発症が予防および一部発症の場合は症状が改善される。（上位目標 1 に寄与）</p> <p><達成度> 両地区で計 148 人（ガザ地区 100 人、西岸地区 48 人）の子どもを対象に PSC ワークショップ（以下、WS）を行なった結果、PTSD を発症した子どもはおらず、開始時に一部症状が見られた子どもについては、症状の改善が認められ目標を達成した。</p> <p>プロジェクト目標 2: ガザ地区ラファ市およびハンユニス市、西岸地区において、心理社会的ケアの知識と経験を持つファシリテーターが育成され、各事業地において本来の効果的な PSC モデルが根付く準備が整う。（上位目標 2 に寄与）</p> <p><達成度> 両地区で計 55 人（ガザ地区 18 人、西岸地区 37 人）を対象にファシリテーター育成トレーニングを行なった結果、対象参加者にファシリテーターとしての PSC の知識と経験が蓄積され、各地区のおかれた環境やニーズに応じた PSC モデル確立に向けた素地が整ったと判断されることから、目標を達成した。</p> <p>プロジェクト目標 3: ガザ地区と西岸地区において、一般的な PSC の認知度が向上し、PSC が普及するための基礎が築かれる。（上位目標 2 に寄与）</p> <p><達成度> 両地区において、Facebook、映画上映会、ラジオ出演、シンポジウム（西岸のみ）等の活動を通じ、行政や各支援団体、学校関係者、保護者らの認知度が高まり、更に一般の人々に広く周知されることにつながった。各方面から多くの高い関心を集め、プログラムの導入および参加を望む声を受けた。パレスチナで PSC が普及していく環境が整ったと判断されることから、目標を達成した。</p>

¹ PTSD: 心的外傷後ストレス障害 (Post-Traumatic Stress Disorder)。命の安全が脅かされるような恐怖とショックを伴う出来事（戦争、天災、事故、犯罪、虐待など）による精神的な外傷（トラウマ）の後遺症。主な症状として、回避症状（トラウマの原因となった出来事に関することを避けようとする心の動き）、侵入症状（「再体験」とも呼ばれるように、トラウマの原因となった出来事が悪夢やフラッシュバックを通して何度も繰り返されること）、過覚醒症状（自律神経の乱れや不眠など、身体が継続的に過剰反応している状態）などがある。PTSD に繋がる病態としては「記憶の倒錯、抜け落ち現象」、「記憶と感情の解離現象」の 2 つが挙げられ、トラウマ体験に向き合いその記憶と感情を思い出すことでトラウマ体験のストーリーを再構成していくことが回復に有効であるとされる。

(2) 事業内容

1. ガザ地区における心理社会的ケアの実践と人材育成

2 年次に続き、ラファ市の「エルアマル社会復帰協会」(AlAmal Rehabilitation Society)、ハインユニス市の「ブリリアント・フューチャー協会」(Brilliant Future Association)、「アバサン地区町内会」(Neighborhood Committee of Abasan Al Jadida) と提携し、以下の事業を実施した。

(参照：別添②ガザ地区事業実績)

1-1. 子どもたちを対象とした心理社会的ケアプログラムの実施

1-1-1. ワークショップの実施

9 歳～14 歳前後の子どもたち 100 名 (男子 48 名、女子 52 名、うち聴覚障がい児 22 名含む) を対象に、以下の通り PSC プログラムを実施した。

	エルアマル 社会復帰協会	ブリリアント・ フューチャー協会	アバサン地区 町内会
クラス数	2	2	2
人数/ クラス名	22 名(男子 10 女子 12)/C 18 名(男子 7 女子 11)/F 計 40 名	15 名(男子 9 女子 6)/A 15 名(男子 7 女子 8)/D 計 30 名	女子 15 名/B 男子 15 名/E 計 30 名
時間	週 1 回 90 分		
回数	各クラス 34 回		

1-1-2. 相互理解アクティビティ

5 日間の集中 WS (サマーキャンプ) を 6 月 15 日～20 日実施した。

1-1-3. 最終発表会の実施

2020 年 2 月 19 日、プログラムの集大成として開催し、200 名を超える参加者が来場した。

1-2. 関係者・関係機関との連携

1-2-1. 情報交換ミーティングの実施

活動 1-1. の子どもたちの周囲環境を把握し、日々の WS や事業後の展開に役立てるため、更には子どもたちの家族や関係者へ PSC の理解を促すことで子どもたちへのサポートを強化するため、各提携団体において定期的に関係者間のミーティングや家庭訪問を実施した。

1-3. 心理社会的ケアプログラムのファシリテーター育成

1-3-1. ファシリテーター育成研修の実施

各提携団体のスタッフ各 6 名、合計 18 名 (男性 8 名、女性 10 名) の研修生に対し研修を実施した。研修生を 2 グループに分け、座学研修と活動 1-1-1 の中で子どもたちへの実践 WS を各グループ 35 回実施した。

5 月には桑山専門家を派遣し、対象者への PSC 理解促進とワークショップスキルの向上を目的に実践的な指導を行った。

1-4. 心理社会的ケアプログラムの普及

1-4-1. メディア活動

Facebook で 30 回投稿し、日々の活動を発信したほか、PSC に関する動画を 2 本制作し、YouTube にアップした。また、活動 1-1-2 サマーキャンプ前後に TV とラジオ出演をし、PSC と活動を紹介。その後地元紙のインタビューを受け、活動の様子が掲載された。

1-4-2. 心理社会的ケア説明会・映画上映会の開催

2019年12月18日に映画上映会を、2020年1月8日にPSC説明会を開催した。

2. ヨルダン川西岸地区における心理社会的ケアの実践と人材育成

ラマツラの「ナフス・エンパワーメント(Nafs for Empowerment)」と提携し、以下の事業を実施した。(参照：別添③西岸地区事業実績)

2-1. 子どもたちを対象とした心理社会的ケアプログラムの実施

2-1-1. ワークショップの実施

UNRWA(国連パレスチナ難民救済事業機関)の小中学校に通う7年生(2019年9月に進級し8年生となった)の男女各24名計48名の子どもたちを対象に、以下の通りPSCプログラムを実施した。

	カランディア難民キャンプ	ジャラゾン難民キャンプ
クラス数	4(男女各2グループ)	2(男女各1グループ)
人数	8名/クラス 計32名	8名/クラス 計16名
時間	週1回90分	
回数	各クラス29回 *うち1回はグループ・アクティビティ。5月に両キャンプ全グループ合同でカランディア難民キャンプにて実施。	

WSスケジュールについてはプログラム開始時点で各学校と相談し、学校のスケジュール等を加味して変更したほか、実施途中でも学校側の都合により変更した。また、今年度はラマダンの日程と長期学力考査試験が重なり、西岸地区は8月末まで夏季休暇となったため前半の実施回数が少なかったが、9月第1週からほぼ休みなく実施し、計画通り全29回完遂した。

2-1-2. 最終発表会の実施

2020年2月23日カランディア難民キャンプ、2月24日ジャラゾン難民キャンプで開催した。

2-2. 関係者・関係機関との連携

2-2-1. 情報交換ミーティングの実施

本事業のプログラムに参加する子どもたちと彼らを取り巻く環境にかかる情報交換のため、関係者・関係機関とのミーティングを計32回実施した。

2-2-2. ワークショップの実施

2019年9月3,8,9,10日カランディア難民キャンプで、2019年9月15~18日ジャラゾン難民キャンプで各4日間開催し、計61名が参加した。家庭によっては父母以外の家族が保護者の役割を果たしているケースも少なくないことから、“保護者”の枠を広げ、事業1~3年目の“保護者”を対象に実施したが、参加者61名のうち保護者は34名にとどまった。保護者の参加率が低いことは、両難民キャンプで活動する支援団体にとって共通の課題となっており、今後保護者を巻き込めるような対策が求められる。(詳細は(3)達成された成果および別添⑤田川専門家レポートをご参照いただきたい)

2-2-3. ニュースレターの配布

PSCプログラムに参加する子どもたちの家族と学校関係者を対象に2回発行した。(別添⑩西岸地区ニュースレター)

	<p>2-3. 心理社会的ケアプログラムのファシリテーター育成</p> <p>2-3-1. ファシリテーター育成トレーニングの実施 スクールカウンセラーや地元の心理士等に対し、7月13～16日ベツレヘム、8月19日～22日ジェニンで各4日間実施した。全日程参加できない者が数名いたが、最多でベツレヘム19名、ジェニン18名、計37名が参加した。派遣中の田川専門家がベツレヘムのトレーニングにスーパーバイザーとして参加し、直接指導を行った。</p> <p>2-3-2. PSC ファシリテーターネットワーク（以下、ファシネット）のフォローアップ活動 2年次に構築したPSC ファシネットメンバーを対象に、ラウンドテーブルを2019年12月21日、28日の2回開催し、12名が参加。続くフォローアップトレーニングを2020年1月2～4日の3日間実施し、22名が参加した。派遣中の田川専門家がベツレヘムのトレーニングにスーパーバイザーとして参加し、直接指導を行った。</p> <p>2-4. 心理社会的ケアプログラムの普及</p> <p>2-4-1. メディア活動</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ Facebook で 20 回投稿し、日々の活動を発信した。 ・ 7月2日、9日、13日の計3回ラジオ番組に出演した。 ・ 7月28日と2月26日に地元紙に活動の様子が掲載された。 <p>2-4-2. 映画上映会 6月25日にジャラゾン難民キャンプ、7月2日にラマツラ市内にて各1回上映し、それぞれ80名、36名、計116名が来場した。</p> <p>2-4-3. 心理社会的ケアシンポジウム 2020年2月26日ラマツラ市内のホテルで開催し、計86名が来場した。</p> <p>また、活動外ではあるが、2月18日にラマツラ市内のホテルで開催された日本大使館主催の天誕レセプションにブース出展し、来場者に活動紹介やシンポジウムの案内を行い、広報に努めた。</p>
<p>(3) 達成された成果</p>	<p>1. ガザ地区における心理社会的ケアの実践と人材育成</p> <p>1-1. 子どもたちを対象とした心理社会的ケアプログラムの実施</p> <p>1-1-1. ワークショップの実施</p> <p>1-1-2. 相互理解アクティビティ</p> <p>期待される成果 1：PTSD の完全発症の予防および一部発症の場合は症状の改善。</p> <p>➤ 指標 1-1：一般健康質問紙（以下、GHQ²）： 心の健康度を測る GHQ を PCS プログラム前後に実施し、それぞれの平均値の差を比較する t 検定において有意差を示す p 値が 0.05 を下回る。 <成果> プログラムに参加した全ての子どもの平均値が改善し、t 検定においては、p 値が 0.01 をも下回る有意差を示したことから目標を達成した。 （参照：別添④桑山専門家レポート 別紙-1GHQ と PTSD 結果解析）</p> <p>➤ 指標 1-2： PTSD チェックシート：</p>

² GHQ：一般健康質問紙（General Health Questionnaire）。本事業では GHQ12 問版を桑山医師が子どもたちに合わせて改変した「Kuwayama-12」を使用し、便宜上こちらを「GHQ」と表記している。

PSC プログラムの開始後 1-2 か月と最後の 1-2 か月に同プログラムを実施するファシリテーターが自身の観察結果や保護者・学校関係者・子どもからの情報を基に記入し、事前チェックでチェック項目に当てはまった子どもについては事後チェックにおいてその項目数が 1 つ以上減少すること、事前チェックで当てはまる項目がなかった子どもについては事後チェックにおいても該当項目なしとなること。

<成果>

全 100 名のうち、有効回答 96 名中 95 名の子どもについて項目数が 1 つ以上減少した。唯一減少しなかった子どもについても数値は横ばいであり、ファシリテーターの報告によるとトラウマに向き合っている様子は確認され、チェックシートの数値に表れていないのは言語的な理解度の問題と考えられることから、目標はほぼ達成したと判断される。

(参照：別添④桑山専門家レポート 別紙-1GHQ と PTSD 結果解析)

1-1-3. 最終発表会の実施

期待される成果 2: トラウマからの回復の最終段階である社会との再結合が実現する

➤ 指標 2-1. 子どもたちへのアンケート：最終発表会後に実施し、半数以上の子どもが、最終発表会が社会との再結合に有効であったことを示す回答をする。

<成果>

アンケートは紙面で行い、参加した 100 名全ての子どもが最終発表会を「大変有意義だった」と回答。具体的には、「1 年間のまとめができて良かった。心がすっきりした。」「両親が見に来てくれたことが嬉しかった。自分がやっていることを認めてもらえた。家族だけでなく親戚や近所の人たちも見に来てくれて、誇らしかった。」「トラウマを受けていたことをとても悔しく思っていたけれど、ある意味トラウマのおかげで、こうして大きな発表会に出ることができた。感謝している。」などの感想が寄せられた。以下、研修生（活動 1-3）によるアンケートの分析結果を抜粋する。

(アンケート結果分析)

・全体を通して、子どもたちは個人レベルでプログラムから大きな利益を得たことを表明してくれた。これは家族、学校、WS での関係を通して明らかだった。子どもたちのほとんどは、自宅で友人や兄弟姉妹にこのプログラムについて話し、そこで自分のトラウマを語ることで能力が上がっていると感じ、プログラムの恩恵を受けてきたことを伝えてきた。

・ほとんどの子どもたちが、同じグループ内の仲間から新しい知見を学び、表現の手法を学んだと回答。これは、同じグループ内での相互作用のおかげであり、サマーキャンプなどの全てのグループ間の共同活動を通じて、新しい友情を築くのに役立ったと語った。

・子どもたちはその多くが音楽、映画、ドラマなどの 4 次元表現に特に力を入れていたため、その発表を中心とした最終発表会が最大の見せ場となった。子どもたちは多くのカメラの前に立ち、自信と自尊心が増した。

・また、子どもたちは特に描画と粘土細工のセッションが大好きだった。自分の内面にあるトラウマの記憶と感情を表現し、ディスカッションを通して、更に表現力を高めていった。これは、過去にトラウマを経験したほぼ全ての子どもたちに見られた現象だった。彼らは見事な適応力で 1 年間のセッションを終えた。

・最終発表会ではみんなで作詞した歌を歌うことが一番誇らしかったという。発表会は今までの人生の中でもっとも感動する時間であったと多くの子どもたちが語った。

これを以って、最終発表会がPSCプログラムの最終段階である社会との再結合の場になったことを示しており、目標を達成したと判断される。

- 指標 2-2. 最終発表会参加者へのアンケート：最終発表会後に実施し、半数以上の参加者が子どもたちの発表を好意的に受け止めたことを示す回答をする。

<成果>

アンケートは当日紙面および後日聞き取りを行い、全ての参加者が「素晴らしかった」と評価した。参加した保護者からは、「自分の子どもの元気に歌う姿を見て涙が出てきた。常に虐げられ、傷つけられてきた人生であったが、子どもの姿を見てそんな人生であっても光り輝く時があるのだと教えられた。この事業を多くの子どもたちに提供してほしい。」、ラファ市長からは、「心理社会的ケアを実施できる人材が、とても多くなっていることに驚いた。今回複数の団体に対してその技術を伝えてくれたが、それがこの最終発表会の質の高さにつながったと思う。これからも多くの人がこの手法を実施できるようになると良いと思う。」との感想が寄せられた。

これを以って目標を達成したと判断される。

(期待される成果 1 と 2 共有)

- 指標 3. ナラティブレポート²：世界の精神学会で主流となっているナラティブ（物語）評価を採用。2例以上の子どもたちの改善例を報告する。

<成果>

各提携団体から計 10 例の子どもたちの改善を示すナラティブレポートが報告された。このうち 2 名の子どもの事例について、別添⑥ナラティブレポートの通り報告する。

- 指標 4. 専門家レポート：事業の最後に提出してもらい、総合的に心理社会的ケアプログラムが有効であったと判断される。（西岸地区と共通）

<成果>

桑山専門家が 2 月派遣時に両地区の最終発表会と西岸地区のシンポジウムに出席して総合評価を行い、有効であった旨報告した。

（参照：別添④桑山専門家レポート）

1-2. 関係者・関係機関との連携

期待される成果 1：関係者・関係機関との連携が強化され、関係者・関係機関の子どもたちおよび彼らが抱える問題に対する対応が改善されることで、子どもたちへのサポートが強化される。

- 指標 1-1. 情報交換ミーティングの数：

<成果>

以下の通り実施し、目標回数を達成した。

■ エルアマル社会復帰協会：

- 当該団体代表およびスタッフとの意見交換会：3回

² ナラティブレポート：プログラムを通して生じた変化を子どもたちの物語としてファシリテーターの視点でまとめた報告書

- 学校関係者との意見交換会：1回
- 家族意見交換会：2回
- 個別面談：1回
- 家庭訪問：1回（計6家族）※
- ブリリアント・フューチャー協会：
 - 当該団体代表およびスタッフ：3回
 - 家族意見交換会：2回
 - 個別面談：1回
- アバサン地区町内会：
 - 当該団体代表およびスタッフ：3回
 - 家族意見交換会：2回
 - 個別面談：1回

※中間報告書では、家庭訪問は安全性確保の観点から保護者側が提携団体に来訪して個別面談で代替した旨報告したが、その後安全性が確認できたことから、エルアマル社会復帰協会が6家庭を訪問した。

- 指標 1-2. アンケート：半数以上の関係者・関係機関においてPSCへの理解向上や対応改善が見られることを示す回答をする。

<成果>

プログラム終了後、3提携団体の幹部およびスタッフ計18名、学校関係者5名、保護者代表20名（20家族）の合計43名に対してアンケートを実施した。その結果、全員から理解向上と対応改善を示す結果が得られ、約96%が「非常に」改善したと回答し、目標を達成した。

- 指標 1-3. ナラティブレポート：実施された対応や変化を1事例以上報告する。

<成果>

子どもたちと同様、数値では測れない効果の指標としてナラティブレポートを採用し、全12事例作成した。このうち2事例について、別添⑦関係者ナラティブレポートの通り報告する。

1-3. 心理社会的ケアプログラムのファシリテーター育成

期待される成果 1:PSCの知識と経験を持つファシリテーターが育成される。

- 指標 1-1. 心理社会的ケアプログラム理解度テスト：ファシリテーター育成研修の後に実施し、全研修生が7割以上の点数を取る。

<成果>

本テストは前年度事業で新規作成した、理論14問、ファシリテーション技術13問、計27問を用いて、その理解度を測るものであり、全研修生18名に対して実施した。その結果、理論が正答率92%、技術が正答率89%、総合正答率は91%で、目標の7割を達成した。

理論に関しては、PTSDの3大症状について問われた質問に対して、「トラウマを受けて落ち込んでいたり不安になっている状態も含まれる」と2名が誤答。同じく2名が「心理社会的ケアは専門家が常に立ち合わないといけない」と誤答し、この2名に対してはテスト後指導し、理解を得ることができた。

技術に関する誤答を分析すると、「子どもたちを導くのがファシリテーターの役割なのではないか」と思いすぎているがゆえの誤答であると考えられる。理論でそうした「導き」「指導」は心理社会的ケアにとって最も避けなければならない姿勢であると学んではいるものの、実際の現場に立って、どう制作しようかと迷っている子どもたちがいた時、つい

日常の習慣で「導いて」しまい、結果的に子どもたちが短時間で制作できたことで達成感を感じるケースが往々にしてある。この点についてもテスト後、18名全員に対してその結果をフィードバックし、再指導したことで理解が得られた。

- 指標 1-2. ファシリテーター能力評価：弊団体の PSC ファシリテーター（現地スタッフ）により評価を実施し、全研修生が合格ラインを超える。

＜成果＞

本評価は、「子どもとの関わり」「自己内面」「フィードバック面」「ワークショップ運営面」の4つの項目で合計20の視点から、トレーナー（弊団体ファシリテーター）がトレイニー（研修生）を評価するものであり、ガザの特性に合わせて今年度新規に作成したものである。全ての項目において100%の評価を得たものが18名中9名。残りの9名についても91%～98%で、総合97.89%の評価となった。合格ラインについては予め数値を設定せずトレーナーの判断に委ねることとしたが、結果90%以上の高評価は、ファシリテーターとして十分な技術を身につけた人材が育った表れであると判断される。詳細な分析については、別添④桑山専門家レポート 別紙-4 ガザ地区トレイニー能力評価をご参照頂きたい。

期待される成果 2: 各事業地において本来の効果的な PSC モデルが根付く準備が整う。

- 指標 2. 研修生による本事業外での PSC の実施：2 事例以上報告する。

＜成果＞

18名の研修生は、3つの提携団体に属しており、本事業以外での PSC の実施はトレーニングの総仕上げ的な意味合いもあり、1月19日に3団体が一斉実施した。トレーニングという環境下を離れ、本事業でケアを受けている子どもたち以外を対象とした。別添⑧ガザ地区トレーニングレポートの通り報告する。

1-4. 心理社会的ケアプログラムの普及

1-4-1. メディア活動

1-4-2. 心理社会的ケア説明会・映画上映会の開催

期待される成果 1：PSC プログラムの認知度が向上する。

- 指標 1-1. Facebook ページの投稿数：月2回以上

＜成果＞

全28回、月平均2.25回投稿し、目標を達成した。ラマダン、長期夏期休暇、冬期休暇などでWSを実施していない期間は投稿が無い月もあったが、それを補う形で活動が盛んな時期には月5回投稿するなど、普及に努めた。加えて、事業終了後となったものの、聴力障がい児との取り組みを中心にまとめた6年間の総括と、子供と向き合う際の心得について、4月2日にエッセイを掲載した。また、活動1-1-2サマーキャンプ前後にTV番組“Palestine TV”とラジオ番組“Broadcasting”に出演をして、PSCと活動を紹介。その後地元紙“Alwatan Voice”のインタビューを受け、活動の様子が掲載された。

- 指標 1-2. PSC 紹介動画を制作し放映する

＜成果＞

以下2本の動画を制作し、YouTube や各説明会の場で放映した。

- (1) 過去の PSC プログラム参加者がそのとき何を感じ、今何を得て生活しているかについてのインタビュー
- (2) 「心理社会的ケア」を物語化し、実際に裨益者の子どもと研修生が出演した分かりやすいドラマ仕立ての動画。

➤ 指標 1-3. PSC 説明会・映画上映会参加者数：各回 30 名以上

<成果>

(1) 映画上映会

日時：2019 年 12 月 18 日（木）

場所：アバサン地区町内会内ホール

参加者：42 名

内容：映画「ふしぎな石～ガザの空」の上映。上記 2 本の啓発動画の鑑賞。その後ディスカッション。

成果：参加者は一様に PSC ケアの必要性を強く認め、こうした「映画」、「映像」という媒体で表現されることに驚いていた。そして閉鎖されているガザにおいても、少しの製作用機材さえあれば映像として作品を作り、こうした形でトラウマに向き合い、それを社会に向けて発信できるということを理解し、今後の PSC プログラムの発展に大きく役立つとの意見で一致した。

(2) PSC 説明会

日時 2020 年 1 月 9 日（木）

場所：ブリリアント・フューチャー協会内ホール

参加者 38 名

内容：PSC の活動の中で制作された描画、粘土細工、ジオラマを展示し、その意味を説明。その後ディスカッション。

成果：参加者は子どもたちが創り上げた作品について一つ一つ説明を受け、その表現力の多様さに感銘を受けていた。これまでガザ地区において、このように「もの作り」からトラウマを表現し、それについて話し合いを持つという視点がなかったからである。しかし、この手法によって子どもたちはよりトラウマに向き合い、それを内包して共に生きていこうとする姿勢の説明を受けて、一同がこの手法の意味を理解した。同時に研修生（活動 1-3）に対しても多くの質問が挙がった。特に多かったのは「トラウマを表現して、泣き出したらどうするのか」というもので、それに対して研修生らは、「泣かれることを恐れるあまり、それに触れないということは良くない。まずは時間をかけてしっかりと受け止め、“泣いてもいい” “語ってもいい” という場所を提供することが大切である。そしてその表出をグループが受け止めることに大きな意味がある。それは自分の辛い経験が他者によってシェア（分かち合い）される事で一つの人生の物語となっていくからだ。」と答えた。研修生も十分な技術を身につけ、故に PSC の意味が広く伝えられる結果となった。

➤ 指標 1-5. 参加者アンケート：半数以上の参加者が、PSC 説明会とシンポジウムが、PSC プログラムを理解するのに有益であったと回答する

<成果>

西岸でのシンポジウムは不参加となったため、PSC 説明会と映画上映会でのアンケート結果について報告する。

両イベントにおいて、有益か否か同じ質問をし、リッカード法によって 4 段階評価で行った結果、全参加者が「有益であった」と回答、「非常

に有益」は、上映会 93%、PSC 説明会 86%であった。上映会がやや上回ったのは、やはり視覚に訴える映画の方が分かりやすく、インパクトがあるためと思われるが、共に高い値であり、この活動が PSC プログラムを理解するのに有益であったことを示している。

2. ヨルダン川西岸地区における心理社会的ケアの実践と人材育成

2-1. 子どもたちを対象とした心理社会的ケアプログラムの実施

2-1-1. ワークショップの実施

期待される成果 1 : PTSD の完全発症の予防および一部発症の場合は症状の改善。

➤ 指標 1-1. GHQ : PSC プログラムの事前と事後に実施し、それぞれの平均値の差を比較する t 検定において有意差を示す p 値が 0.05 を下回る。

<成果>

カランディア、ジャラゾン共にプログラムに参加した全ての子どもの平均値が改善し、t 検定では p 値が 0.01 以下の有意差を示しており、目標を達成した。(参照：別添④桑山専門家レポート 別紙-1 GHQ と PTSD 結果解析)

➤ 指標 1-2. PTSD チェックシート : PSC プログラムの開始後 1-2 か月と最後の 1-2 か月に同プログラムを実施するファシリテーターが自身の観察結果や保護者・学校関係者・子どもからの情報を基に記入し、事前チェックでチェック項目に当てはまった子どもについては事後チェックにおいてその項目数が 1 つ以上減少すること、事前チェックで当てはまる項目がなかった子どもについては事後チェックにおいても該当項目なしとなること。

<成果>

全ての子どもたちが事前チェックにおいてその項目数が 1 つ以上減少した。「両側検定」においてもカランディア、ジャラゾン両難民キャンプ共に 0.05 以下の有意差を示した。本活動が PTSD の症状群を軽減ないしは消滅させることに有効であったことを示しており、目標を達成した。(参照：別添④桑山専門家レポート 別紙-1 GHQ と PTSD 結果解析)

➤ 指標 2-1. 子どもたちへのアンケート : 最終発表会後に実施し、半数以上の子どもが、最終発表会が社会との再結合に有効であったことを示す回答をする。

<成果>

アンケートは当日ヒアリング方式で実施し、全ての子どもたちが、最終発表会を「大変有意義だった」と回答。「みんなで作ったジオラマを大勢の前で披露できて達成感を感じた」、「作品についてうまく説明できて自信が持てた」、「おばあちゃんや親戚まで来てくれて嬉しかった」といった感想が寄せられ、社会との再結合に有効であったことを示す回答であると判断される。

➤ 指標 2-2. 最終発表会参加者へのアンケート : 最終発表会後に実施し、半数以上の参加者が子どもたちの発表を好意的に受け止めたことを示す回答をする。

<成果>

アンケートは、家族、学校関係者、友人など計 77 名 (カランディア 45 名、ジャラゾン 32 名) の参加者に対して、当日紙面とディスカッション方式で行い、全員が「素晴らしかった」と好意的に受け止めたことを

示した。「消極的な子どもだったのに、堂々と話せるようになって驚いた」、「子どもが自身の感情や考えを表現できるようになり、トラウマに向きあう力をつけたことがよく分かった」、「自信をつけた」、「この活動が本当の意味で強くなるきっかけを作ってくれた」といった感想やスタッフへの感謝が多く寄せられ、当日我が子の発表の様子に涙する母親の姿も見られた。保護者からは「家で活動について話してくれるようになり、家族の対話が増えた」との声が寄せられた。

(期待される成果1と2共有)

- 指標 3-1. ナラティブレポート：世界の精神学会で主流となっているナラティブ（物語）評価を採用。2例以上の子どもの改善例を報告する。

<成果>

別添⑥ナラティブレポートの通り2事例報告する。

- 指標 4-1. 専門家レポート：事業の最後に提出してもらい、総合的に心理社会的ケアプログラムが有効であったと判断される。（ガザ地区と共通）

<成果>

桑山専門家が2月派遣時に両地区の最終発表会と西岸シンポジウムに出席して総合評価を行い、有効であった旨報告した。

（参照：別添④桑山専門家レポート）

なお、西岸については、本3年次において、WSの1クラスあたりの子どもの人数を1~2年次の14~19名から8名に減らした。この結果、WSの質が飛躍的に向上し、上記成果の発現につながった。また、以下2-3で報告の通り、ファシリテーター育成にも良い影響をもたらした。詳細は、別添⑤田川専門家レポートをご参照いただきたい。

2-2. 関係者・関係機関との連携

2-2-1. ミーティングの実施

2-2-3. ニュースレターの発行

期待される成果1：関係者・関係機関との連携が強化され、関係者・関係機関の子どもたちおよび彼らが抱える問題に対する対応が改善する。

- 指標 1-1. ミーティングの数：

<成果>

以下の通り実施し、目標回数を達成した。

- 保護者：6回（カランディア3回、ジャラゾン3回）+随時個別連絡
- 学校長およびスクールカウンセラー：12回（カランディア女子3回・男子3回、ジャラゾン女子3回・男子3回）+週一ペースの情報交換
- 教師：8回（カランディア女子2回・男子2回、ジャラゾン女子2回・男子2回）
- UNRWA Camp Director：2回（カランディア1回、ジャラゾン1回）
- UNRWA Education Program：2回
- UNRWA Relief and Social Services Program：4回（カランディア2回、ジャラゾン2回）

- 指標 1-2. ニュースレターの発行回数：2回

<成果>

2019年9月と2020年1月の2回発行し、目標を達成した。

（別添⑩西岸地区ニュースレター）

2-2-2. ワークショップの実施

期待される成果 2: PSC プログラムやトラウマを抱えた子どもへの接し方について保護者の理解が深まる。

- 指標 2-1. 参加者へのアンケート: WS の最後に実施し、半数以上が PSC プログラムおよびトラウマを抱えた子どもへの接し方について十分な理解を得たことを示す回答をする。

<成果>

2019 年 9 月にカランディア、ジャラゾン両難民キャンプで各 4 日間保護者を対象に実施した。アンケートは紙面とヒアリングの両方で行い、参加した全員がワークショップは「(非常に) 有効だった」と回答し、プログラムと子どもたちへの接し方について理解を得たことを示した。また、上記指標 2-2 の通り、最終発表会における保護者の反応からも本プログラムへの理解と有効性を示す回答が確認されている。

但し、(2) 事業内容で報告の通り、全体として保護者の参加率が低かったこと、またプログラムの内容や実施方法に課題あったことから、本指標達成を以って保護者の理解が十分に得られたとは言い難く、右課題については改善の余地がある。

(上記期待される成果 1 と 2 共通)

- 指標 3. ナラティブレポート: 関係者・関係機関の対応改善例を 2 例以上報告する。

<成果>

別添⑦関係者ナラティブレポートの通り 2 例報告する。

- 指標 4. 関係者・関係機関へのアンケート: 事業の最後に実施し、半数以上が本事業との連携が子どもたちや彼らが抱える問題への対応方法を見直すのに有効であったことを示す回答をする。

<成果>

学校関係者 20 名に紙面とヒアリング方式で実施し、全員が「(非常に) 有効であった」と回答。「一人一人の子どもを注視し、子どもとの個別面談の機会を作るようになった」、「生徒の一人が亡くなり、皆悲しみに沈んでいた中、本事業との連携がこの辛い出来事を克服するための助けになった」、「素行に問題がある子どもとのコミュニケーション方法を変え、やる気を起こさせ、活動への参加やクラスメイトとの交流を促すことで、前向きで創造性豊かな子に変わっていった」といったコメントが寄せられ、子どもたちへの対応方法を見直すのに有効であったことを示した。

2-3. 心理社会的ケアプログラムのファシリテーター育成

2-3-1. ファシリテーター育成トレーニング

期待される成果 1: PSC プログラムの理解と実践スキルを有する人材が増える。

- 指標 1-1. 心理社会的ケアプログラム理解度テスト: トレーニングの事前・事後に実施し、半数以上の参加者に点数の向上が見られる。

<成果>

7~8 月ジェニンとベツレヘムで各 4 日間実施した。ジェニンでは参加者 18 名中 15 名の点数が向上し、ベツレヘムでは 19 名中 14 名に点数向上が見られ、目標を達成した。特に正解率が低かった質問としては、

「PSC の主要目的は社会との再結合である」: 21%、

「プログラムのファシリテーターは、各ワークショップの前にすべての質問を準備することが重要」: 11%、

「子どもたちが自信をつけるためには最終発表会で聴衆から評価されることが重要であり、ファシリテーターは、子どもたちが良い作品を作るのをサポートすべきである」：11%

「PSC プログラムは、子どもが自分のつらい体験に立ち向かうことができるよう、個人セッションとして行う場合がある」：10%

(いずれも正解は“NO”)

更にその理由まで正答できたものはゼロ～数%にとどまった。テスト結果については、参加者にフィードバックし、理解を促した。

西岸で初めての試みだったこと、(2) 事業内容で報告の通り、4日間フルで参加出来なかったものがいたこともあり、今回のみでは十分に理解が進まなかったと考えられる。また、西岸に関しては、まだまだ指導する側のファシリテーター(現地スタッフ)のスキル向上も必要である。1年次から本3年次にかけて西岸4都市でトレーニングを実施できたことはPSC普及への大きな成果であったものの、今後ファシリテーター育成には更なる実践者トレーニングが望まれる。詳細は別添⑤田川専門家のレポートもご参照いただきたい。

2-3-2. 心理社会的ケアファシリテーターネットワークのフォローアップ活動

期待される成果2：PSCプログラムの実践例が増える。

- 指標と目標 2-1. PSC ファシネットラウンドテーブルおよび同トレーニングの参加者数：20名。(上記ラウンドテーブルとトレーニングはファシリテーター育成トレーニング後にPSCプログラムを実施した者を対象としている。)なお、上記ラウンドテーブルとトレーニングへの参加要件を満たす者が20名に満たない場合、PSCプログラムを実践していない者も対象とすることで、なぜ実践することが難しかったのかについて聞き取りを行ない、その課題点をレポートにまとめることとする。

<成果>

参加者は22名であったが、このうち上記参加要件である“ファシリテーター育成トレーニング後にPSCプログラムを実践した”人数は14名だったため、残り8名は実践していない者を対象とした。実践するのが難しかった理由については、

- ・実施機会がない(無職や学生のため)
- ・実施許可が得られない(団体の場合は他にやるべき活動が決まっていたPSCプログラムを組み込めない、個人の場合は団体の後ろ盾がないためにPSCプログラムを実施したい子どもの保護者から信頼を得られず拒絶される)
- ・PSCプログラムに必要となる道具を買う資金がない

と、個人では容易に実践しづらい状況であることが明らかとなった。

- 指標と目標 2-2. 心理社会的ケアプログラム理解度テスト：トレーニングの事前・事後に実施し、半数以上の参加者に点数の向上が見られる。

<成果>

22名中15名に点数の向上が見られ、目標を達成した。点数が向上しなかった7名のうち4名は同点数、下がった3名についても大きな点差はなかった。平均正答率は72%、極端に回答率の低い質問もなかった。テスト結果については最終日にフィードバックを行い、理解を促した。PSCプログラムを実践した参加者が体験談を共有し、実戦上の困難や、課題について活発な議論がなされた。いずれの参加者からも高い関心と、トレーニングの継続を望む声が多く寄せられた。

2-3-1で上述の通り、西岸でのファシリテーター育成は第一段階を達成

したといえる。詳細は別添⑨ファシリテータートレーニングレポートを、ファシリテーター育成における課題提言については、別添⑤田川専門家レポートをご参照いただきたい。

2-4. 心理社会的ケアプログラムの普及

2-4-1. メディア活動 2-4-2. 映画上映会

2-4-3. 心理社会的ケアシンポジウム

期待される成果 1：PSC プログラムの認知度が高まる。

➤ 指標と目標 1-1. 地元ラジオ局出演：3回

<成果>

7月2日と9日に地元メディア「Wattan News Agency」、7月13日に「Ajyal Radio Network」と計3回ラジオ出演し、PSCプログラムや映画『ふしぎな石』について紹介した。

加えて7月28日、地元紙「Al-Hadath Newspaper」の取材を受け、活動内容が掲載、2020年2月26日には地元紙「Al-Quds Newspaper」にシンポジウム当日の取材の様子が掲載され、パレスチナ全土に広く発信することができ、PSCプログラムの認知度向上に貢献した。

➤ 指標と目標 1-2. 事業 Facebook ページの投稿数：月2回

<成果>

計20回投稿した。月2回×12ヶ月＝計24回を目標としていたが、(2)事業内容で上述の通り、学校側の都合および例年より長い夏期休暇のためWSを実施していない期間(5月～8月)と冬季期間(12月)に投稿ができなかったことが回数減の要因である。目標数には達しなかったものの、右期間以外、特に10月以降は月によっては2回以上投稿し、目標数に近づけるよう努めた。

➤ 指標と目標 1-3. 映画上映会参加者数：各回80名

<成果>

中間報告書の通り、ジャラゾン難民キャンプでは目標の80名を上回っていたが、ラマツラでは、参加者が36名にとどまった。理由は、同じ日程に幾つかのイベントが重なったためである(そのため、後述のシンポジウムでは、他のイベント日程を考慮の上、集客が望める日程を設定した)。但し、参加者が少なかったラマツラでの上映会では、地元メディア Wattan News Agency の取材が入り、オンライン記事と YouTube 動画がアップロードされたため、その波及効果に鑑みて普及活動としての成果は達成したと判断される。

他方、普及という観点では参加人数は1つの指標にはなるものの、映画は実話を元にしており、ジャラゾン難民キャンプでの上映会(＝映画の舞台であり殉教者の家族・親族も参加していた)では、当日は当事者やその家族が悲しみを必死にこらえながらスタッフに映画製作の感謝を伝える場面もあったものの、それ以上の感想は得られなかった。こうしたケースにおいては、当事者への配慮や、感情を吐き出し共有するというPSCプログラムの本質から考えると、状況に応じて慎重に判断し、必ずしも人数によらず、まずは小人数を対象に行うことも検討の余地がある。詳細は別添⑤田川専門家レポートもご参照いただきたい。

➤ 指標と目標 1-4. 心理社会的ケアシンポジウム参加者数：80名

➤ 指標と目標 1-5. 心理社会的ケアシンポジウム参加者に対するアンケート：半数以上の参加者が、同シンポジウムがPSCプログラムを理解するのに有益であったと回答する

<成果>

UNRWA 学校長、教師、スクールカウンセラーなど関係者のほか、所管省庁である社会開発省の担当局長や保健省局長など行政関係者、DORA（パレスチナ解放機構難民問題局）、GIZ、MSF、MAP など他国ドナー、医師や大学関係、日本大使館経済協力局等、多方面から計 86 名が参加した。

アンケートは紙面と当日ディスカッション方式で行い、全員が「有益であった」と回答した。具体的な声としては、

- パレスチナ人が直面している主要課題の1つである非常に重要なプログラムであり、継続の必要がある。（社会開発省担当局長）
- 自閉症の子どもたちが多くの政府機関、社会的機関、地方機関から放置されている。このプログラムを通じて支援してほしい。（保健省局長）
- 我々は教育、社会、心理的な面からチームとして子どもたちを支えなければならない立場のため、プログラムは非常に有益だった。シンポジウムに子どもたちにも来てもらって体験談を聞いたかった。（UNRWA 評価ユニット）
- 我々の活動にも取り入れるべき戦略であり、プレゼンテーションも明確でとても有益だった。（Palestine Academy for childhood 校長）

また、

- 西岸地区でも 12 歳以下でトラウマを抱えている子どもも多い。支援の対象年齢を広げてはどうか。（臨床心理士）
- パレスチナの子どもに今最も必要なもの。イスラエルの検問所に近い公立学校でもニーズが高い。（校医）
- 収監経験者も対象としてはどうか。（収監経験のある一般参加者）

といった提案・助言もあり、提携団体や桑山専門家らと導入普及に向け意見交換を行った。

シンポジウム総評は別添④桑山専門家レポートもご参照いただきたい。

【裨益人口】

総裨益人口：9,732 人

直接裨益人口：664 人

ガザ地区 子どもたち 100 人＋子どもたちの家族 100 人＋研修生 18 人＋提携団体スタッフ 9 人（3 人×3 団体）＋普及関連イベント 80 人（映画上映会 38、PSC 説明会 42）＝307 人

西岸地区 子どもたち 48 人＋子どもたちの家族 48 人＋ファシリテータートレーニング参加者 37 人＋ファシネットトレーニング参加者 22 人＋普及関連イベント参加者 202 人（映画上映会 116、シンポジウム 86）＝357 人

間接裨益人口：9,068 人

(1) プログラムに参加した子どもたちの家族（平均 6 人）へのケア効果が波及

ガザ地区子どもたち 100 人 x 6 人 = 600 人

西岸地区子どもたち 48 人 x 6 人 = 288 人

(2) プログラムに参加した子どもたちの友達（平均 5 人）へのケア効果が波及

ガザ地区子どもたち 100 人 x 5 人 = 500 人

西岸地区子どもたち 48 人 x 5 人 = 240 人

(3) 研修生・トレーニング参加者が本事業外の子どもたちにケアの一部を実施する

ガザ地区研修生 18 人 x 60 人 = 1,080 人

西岸地区トレーニング参加者 37 人 x 60 人 = 2,220 人

西岸地区ファシネットトレーニング参加者 22 人 x 60 人 = 1,320 人

(4) 普及活動の参加者が家族・知人に PSC を紹介し彼らが PSC にアクセス可能となる

ガザ地区普及関連イベント参加者 80 人 x 10 人 = 800 人

	<p style="text-align: center;">西岸地区普及関連イベント参加者 202 人 x 10 人 = 2,020 人</p> <p>なお、数値目標を掲げていなかったものの、ガザ地区の最終発表会は、同地区の普及活動にも資するイベントであったため、直接裨益者=参加者 200 人、間接裨益者=2,000 人（参加者 200 人 x 10）が期待されることも申し添えたい。</p> <p>【SDG における成果】 本事業がパレスチナの子どもたちのメンタルヘルス向上とそれに伴う副次的効果として暴力行為の減少に貢献したことは SDG ゴール 3 のターゲット 3.4 「2030 年までに、非感染症疾患（NCD）による早期死亡を、予防や治療を通じて 3 分の 1 減少させ、精神保健および福祉を促進する」、および、ゴール 16 のターゲット 16.1 「あらゆる場所において、すべての形態の暴力および暴力に関連する死亡率を大幅に減少させる」に直接的に寄与するものである。</p>
<p>(4) 持続発展性</p>	<p>●本事業で両地区において多くのファシリテーターが育った。特に、この第 2 フェーズの 3 年間でファシリテーターとして自立できる人材が育ったガザ地区においては、今後は彼ら自身で本事業で習得した知識や手法を現地で咀嚼し、現地の規模やニーズ、能力に見合ったものに作り直し、現地の PSC モデルを確立していくことが求められる。加えて、桑山専門家がレポートで言及している通り、日常の中に「心理社会的な視点」を身につけていくことも重要である。現地スタッフが自主的にミーティングを行って工夫や改善に努め、試行提案する姿勢が見られることから、その力は十分備えていると考える。一方で、PSC は対象者の選定や、対象者である子どもを過度に指導するなど、あやまった方向に導かれる危険性もはらんでおり、現地の自主性に委ねつつ、プログラムのクオリティコントロールが課題となる。PSC プログラムは、実践者（ファシリテーター）に特殊な技能や資格を必要とせず、取り入れやすい点が強みであり、自立的な活動につながりやすい。同時に、PSC プログラムの質の確保と対象者の安全確保、加えて持続発展のためには、ファシリテーターとしての質・能力を維持管理できる体制を構築することが必要であり、日本側は必要に応じ、こうした取り組みを側面支援するのが妥当である。</p> <p>●西岸地区については、ファシリテーター育成の第一段階を達成したといえるが、西岸においても本プログラムへの評価は高く、ニーズがあることも確認された。事業終了後、現地スタッフが UNRWA のスクールカウンセラーとして採用されたり、提携団体であるナフスが受託した他ドナーの事業にファシリテーターとしてアサインされており、成果とは呼べないものの、PSC が認知され、活動が評価された 1 つの結果といえ、持続性につながるものである。また、シンポジウムで連携を示唆されたパレスチナのローカル NGO とは、その後ナフスが資金調達を含め具体的な連携方法を模索中である。今後はナフスが事業で培われた知見と人材、ネットワークを活用し、各ドナーの資金提供を受け PSC 関連プロジェクトを継続していくことを目指している。</p> <p>また、西岸で PSC プログラムを普及、持続発展させていくためには、難民キャンプの子どもたちだけでなく、様々な立場、年齢層の人や地域に対象に広げていくこと、コミュニティレベルで PSC 普及に取り組んでいくことも検討の余地がある。</p> <p>●また、今後、パレスチナで PSC プログラムを根付かせていくためには、</p>

また資金面の課題を克服していくためにも、これまで協力関係を築いた提携団体を母体として、現場レベルの活動から、組織レベルの活動にスケールアップしていくことが必要である。組織の体制を強化し、他ドナーからPSCプログラムにかかる資金を獲得していくことが望まれる。本事業での普及活動を通じて構築された各支援機関とのネットワークも強化され、PSCプログラムの対象者や対象地の広がりも期待できる。更には、組織レベルから、政策レベルの意思決定者に働きかけ、行政関係者を巻き込んで普及を促進していくことも持続性を高めるのに効果的である。今回、ガザの最終発表会および西岸のシンポジウムにおいて、市長や担当省庁の局長らが出席の下、事業の成果を発信し、PSCへの強い関心と活動への高い評価を受けたことは、そのための大きな一歩といえる。